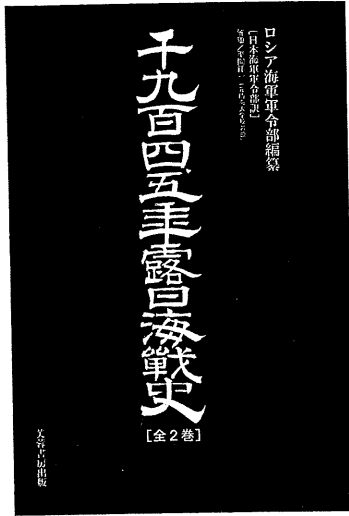


# 復刻されたロシア海軍公刊戦史で明らかになった ロシア側から見た日露海戦の実相

ON RUSSIAN OFFICIAL DOCUMENT OF RUSSO-JAPANESE SEA BATTLES 1904-05 by Yoichi Hirama



ロシア海軍軍令部が編纂し、日本海軍軍令部が翻訳した「千九百四年 露日海戦史」は、防衛研究所や防衛大学校でも2から3冊しか見当たらず、「幻の書」といわれていたが、その全7巻が記念艦三笠で見付かり、11月に芙蓉書房出版から復刻出版された。そこで、本書をもとにロシア海軍の対日戦争計画、ニコライ海軍大学校の対日戦争図演、ロシア海軍の敗因と責任者に対する批判などを紹介したい。

まず論を進めるに先立ち「露日海戦史」の特徴を述べると、本書が編纂された当時は日露協商の帝政時代で、日露両海軍は共通の敵ドイツと「昨日の敵は今日の友」として戦っていた。そして、日本海軍は日露戦争で捕獲し、相模として艦隊に編入していた戦艦ペレスヴェート Peresviet など3隻の軍艦を護送し、さらにアメリカの満州進出を阻止しようとする軍事協定も結んでいた。このような国際関係から、日露両海軍は相互に海戦史を交換し、本書は日本海軍が編纂した『明治三十七八年海戦史』を利用するなど、スターリン時代のような極端な歴史の改竄や反日感情に影響されていない。しかし、白人大国のロシアが有色人種の小国に敗北したことへの屈辱感から、本書は敗因と敗軍の将の責任を追及するに急であるとの印象を受ける。余りにも人身攻撃が辛辣であったためか第5巻は「内部のトラブル」との理由から発刊されなかった。しかし、本書には敗戦の責任を追及するためか、随所にロシア中央政府（皇帝や陸海軍、外務省など）

や、部隊指揮官の措置と、会議における発言や報告書、電文などロシア側の赤裸々な内情が記載されており、それが本書の価値でもある。

## ▶ニコライ海軍大学校の図上演習◀

ロシア海軍が最初に対日戦争の図上演習を行なったのは、三国干渉による日本の反露感情の高まった1896年からであった。次の図演は義和団の乱で満州にロシア軍が侵入した1900年で、その後は満州駐兵をめぐって日露の対立が先鋭化したため、1902年、1903年と毎年行なわれている。最初の図上演習では、兵力劣勢なためロシア海軍が全敗したが、1903年の図上演習では1905年に完成する兵力とし、旅順に戦艦10隻、巡洋艦13隻、駆逐艦36隻、ウラジオストクに巡洋艦4隻を配備した。図上演習は宣戦布告なしの開戦や、旅順港外のロシア艦隊への奇襲、旅順湾口への機雷敷設、外国港湾（仁川）在泊中の巡洋艦が通信不能で武装解除されるなど、ほぼ実際に生じた展開のとおりであった。日露艦隊の主力が激突した黄海海戦の図上演習では、日本艦隊が戦艦の3分の2、ロシア艦隊が2分の1を失い、ロシア艦隊は逃走する日本艦隊を追跡し、済州島付近で捕らえるものの戦艦3隻、巡洋艦2隻と駆逐艦7隻を失った。しかし、日本艦隊は全艦艇が戦闘力を失い、勝利したロシア艦隊で修理を必要とする艦艇はウラジオストクに、その他の艦艇は旅順に向かった。しかしウラジオストクに向かった部隊は日本海軍の残存部隊に撃沈され、陸軍の輸送船を攻撃していた巡洋艦部隊も最後には撃沈されて演習は終わった。

演習終了後にニコライ海軍大学校からは、攻勢作戦を展開するには日本海軍の1.5倍の兵力が必要であり、ヨーロッパからの増援が不可欠である。黄海や日本海の制海権の確保が戦争を左右する。日本艦隊を撃破後は馬山浦を前進基地とすべきであるなどとの図演報告書が提出された。

一方、1901年には極東総督アレクセイ・エフ海軍大將から、太平洋艦隊司令長官スクイドロフ中將に対日戦争計画の立案が命じられた。提出された計画はウラジオストクを主基地とするものであったが、アレクセイ・エフによって旅順を主基地とし、ウラジオストクを通商破壊作

戦用の巡洋艦の基地にすることに改められた。その後、1903年春に戦艦2隻、巡洋艦6隻、水雷艇8隻が回航されると、アレクセイ・エフは対日作戦計画の見直しを命じ、同年4月30日に、艦隊参謀長エーベルガルド大佐から馬山浦を前進根拠地とする作戦計画が提出された。しかしアレクセイ・エフをはじめ会議参加者が、馬山浦は日本に近く水雷艇などの襲撃を受ける危険性があると反対し、アレクセイ・エフは「目下採用ノ価値ナシ」としたが、優勢になった場合を考慮し「棄ツルヘキモノニアラス」と保留し開戦を迎えた。

一方、首都のサンクト・ペテルブルグでは、1903年10月に海軍軍務局の対日作戦計画担当者ブルシロフ中佐が、極東で「絶対優越権ヲ獲得セント欲ス」るならば、「須ラク日本ヲ撃破シ」し、「艦隊保持権ヲ喪失セシメ」なければならない。現在は日本海軍が優勢であるが、2年後には日本の戦艦6隻に対して13隻、装甲巡洋艦も6隻に対して5隻となるので、当面は「縦合、多大ノ讓歩」をしてでも対立を回避するのが「得策」である。「既ニ予メ2カ年後ヲ以テ対日宣戦ヲ布告スルコトヲ決シタル以上」、海軍軍備については「今後2カ年ヲ経日本ニ対シ宣戦スルノ堅キ決心ヲ以テ、不撓不屈戦備ヲ修ムル」べきである。陸軍については「朝鮮ヲ侵略シ得ルニアリ」、それには2年後までにシベリア鉄道を完成させる必要がある。外務省は開戦時までには有利な国際関係を構築すべく努力すべきである。また、戦争は「日本人ヲ撃破スルノミニテハ不充分」で、「更ニ之ヲ殲滅セサルヘカラス」との覚書を提出した。

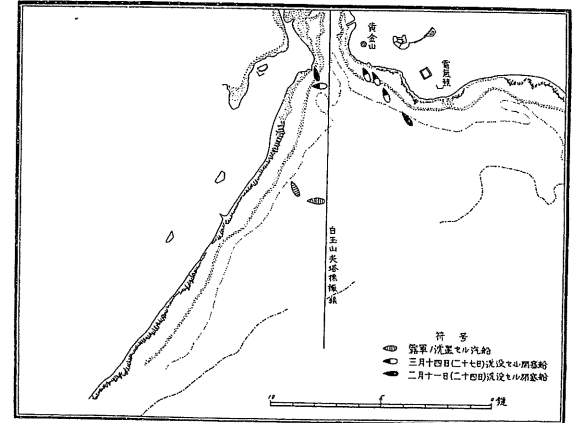
この覚書に軍務局長ロジェストヴェンスキ少将（のち中將、バルチック艦隊司令長官）は、我々の目的は日本を殲滅するのではなく、「単ニ朝鮮ヲ我カ領土ニ併合セントスルニアリ」。したがって海軍兵力も日本海軍を凌駕する必要はなく、「日本軍ヲ朝鮮カラ駆逐セントスル我カ陸軍ノ努力ヲ軽減スレハ足レリ」。日本との戦争はどのような場合でも「吾人ノ利益タル能ハサレハナリ」というものである。日本との戦争は欧米列強との「新戦争ヲ誘発スル」ことになるので、避けなければならないと反対した。

## ▶開戦直前の対日戦争準備◀

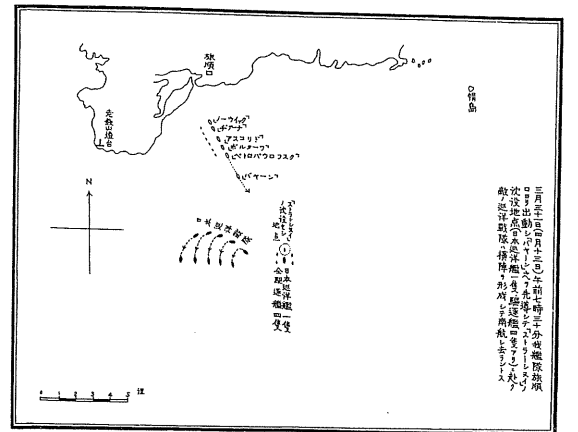
日露関係が悪悪の度を増していた1904年1月28日、日本の提案に対する回答が、海軍元帥アレクセイ・アレクサンドロヴィチ大

公の司会で、クロバトキン陸軍大臣、ラムズドルフ外相、アウエラン海軍総務長官、極東特別委員長アバサ海軍少將などで協議され、ラムズドルフ外相が強く日本との妥協を主張し皇帝に直訴したため、日本への回答は「多少調和ノ精神ヲ以テ作成」された。このような妥協的な回答となり、また回答が遅れたのは充分な兵力が整備されるまで対日戦争を2年間は避けたいとの海軍の意向や、ウエレニユース少將指揮の戦艦オスラビア Oslabia、巡洋艦アウローラ Aurora、ドミトリー・ドンスコイ Dmitri Donskoi、駆逐艦7隻、水雷艇4隻が極東に回航中（開戦時はジブチに在泊）で、これらの艦艇が旅順に到着するまで、交渉を引き延ばしたいという計算もあったのではなかったか。

相互に公使が退去してもロシア海軍が警戒を強めな



旅順口閉塞を企図した日本船の沈没位置（千九百四年 露日海戦史より）



マカロフ提督が戦死した1904年4月13日の戦開（千九百四年 露日海戦史より）

ったが、これは妥協的な回答を送付しており（未着）、前年10月になるべく戦争を避けよとの勅諭をアレクセーエフが受けていたこと、まさか日本が大ロシアに刃向かうことはないとの日本軽視にあった。沿黒龍江軍管区司令官フルーグ陸軍少将からの「動員を完了するまで1か月間、日本陸軍の営口上陸を阻止できるのか？ロシア艦隊が日本艦隊を撃破できない場合に、海軍は日本陸軍の朝鮮半島への上陸をどの程度遅延できるか？」との質問に、太平洋艦隊参謀長ワイトゲフト少将（後の太平洋艦隊司令長官）は、「敵陸軍ノ営口上陸ハ思モヨラサル」ことである。わが艦隊が日本艦隊に「撃破セラルルカ如キハ、到底、余ノ想像ヲ許ササル所」であり、朝鮮半島への上陸も「亦同断」である。海上権は「如何ナル事情」があっても、日本海軍に奪われることはないと回答した。

また、ロシア国民や海軍も日本を「マカーキ（小猿）」と軽視していたため、開戦後2か月間は戦争の国家的意義について「左程社会ノ注意ヲ惹カ」ず、海軍部内においてすら「願ヒセシ者僅小ナリ」という状況であった。このように日本を、これまで征服してきた中央アジアの部族国家程度と考え軽視していたため、主力艦などが予備役から戦艦に指定されたのは開戦半月前であり、戦争準備などはほとんど行なわれていなかった。

### ▶ロシア海軍の敗因と指揮官の弾劾◀

ロシア海軍の敗因は、第1に旧式艦艇が多く、特にバルチック艦隊を補強するために追加されたネボガトフ少将指揮の第3太平洋艦隊に至っては、「浮かぶタイ」といわれた見せ掛けの艦隊であった。また兵員の交代も多く、しかも予算不足のため1年間に出勤訓練をするのは4か月程度に過ぎなかった。さらに1904年10月15日にバルチック艦隊の本隊（第2太平洋艦隊）は、バルト海のリバウ軍港を出港以降、翌年5月27日対馬海峡に到達するまで、ほぼ一貫してイギリスの強い干渉を受けて寄港・休養もままならない状況の中、赤道を越え喜望峰を回る気候変化の激しい7か月に及ぶ厳しい航海を強いられ、このため整備も不十分で艦内には病人が続発し、さらに革命思想が蔓延していた。

本書は艦長や将校の多くは軍人として「遙カニ『ロ』中將ノ上位ニ在リ」、任務を尽し名誉を後世に残しており、特に戦艦クニャージ・スワロフ Kniaz Suvarov、ボロディノ Borodino、インペラートル・アレクサンドル3世 Imperator Alexander III などの奮戦は、「永久ニ我カ海軍ノ龜鑑」となるであろうと讃えている。しかし高級指揮官に対する批判は厳しく、マカロフ中將の戦死後に太平洋艦隊の司令長官となったワイトゲフト少将については、「性来決断力ニ乏シク、機に臨んで「徒ニ遡

スルノミ」、「何等策ノ施ストコロ無ク」、すべての計画を「水泡ニ帰セシメタ」と非難しているが、最も非難されているのは降伏したネボガトフ少将であった。

確かに降伏時には敵に包囲され敵の兵力は圧倒的であった。しかし、ロシアの名誉のために「碧血ヲ流スモ決シテ無益」ではない。古来、戦士の名誉ある死は、「国民ノ士氣ヲ鼓舞」するだけでなく、子々孫々までも及ぼすものである。将士の勇敢な模範的行動は幾世紀を経て、「国旗ノ名誉ト共ニ永久ニ朽セズ」。これに反して不名誉な降伏は後世にまで「臆病ノ因ヲ播クモノナリ」。弱者は自己の卑怯な振る舞いを、ネボガトフ艦隊の降伏を誘惑的な範例とし、わが軍の「組織ヲ腐爛セシムヘシ」とまで評している。さらにネボガトフは降伏して2,400名の命を救ったが、これも「ロシア国民は感謝するであろうか」「ロシアの歴史は、この降伏を是認するであろうか」と厳しく非難している。

またロジェストウェンスキー中將についても、艦長が訪問しても無愛想な態度と、時には侮辱的態度で応接し、「屢々叱責セラルヲ常トセリ」。このため艦長の多くは司令官を恐れ、「残酷ニシテ屈辱的ナル態度」と、全艦隊宛の信号による「苛酷ナル叱責ヲ恐レタリ」。また、司令部には多くの参謀がいたが、すべてをロジェストウェンスキー司令長官が握り、参謀長ですら長官の命令を機械的に実施するほかになんらの余裕もなく、作戦計画の可否等について「論究スル暇ナカリキ」と答えている。また参謀のスウェントルジュツキー大尉は、参謀といっても仕事は暗号文の組立てや翻訳など、機械的な作業に従事しただけで、作戦計画の立案、命令の起案などの参謀業務は、すべてロジェストウェンスキー司令長官自身が行っていたと証言している。そして、対馬海峡突破計画についても「何等討究スル所ナ」く、さらに沖縄沖では石炭を搭載中の1時間半の間に、精神的に過敏となったロジェストウェンスキー中將が、旗旗信号を50回も掲揚し指示を発したことをあげ、「如何ニ興奮セルヤヲ察スルニ足ルヘシ」と述べている。

また、ロジェストウェンスキー中將が艦隊訓練や幹部教育をまったく行なわなかったのは「実ニ言語道断」であり、特に部隊の指揮は「拙劣ヲ極メタリ」と厳しい。そして日本海海戦に敗北したのは、「要スルニ計画極メテ杜撰」であり、思慮浅薄で「何等ノ定見ナキ行動ヲ以テ終結シタ」とりわけ艦隊司令長官の行動は、戦闘中と準備中を問わず「全然正当ナルヲ発見スル能ハス」。また、麾下の指揮官も「全員消極的ニシテ、一モ積極的ニ行動シタル者ナシ」。ロジェストウェンスキー中將は「意志強健ニシテ剛胆又職務ニ忠実」、しかも「補給經理ノオアルモ、悲哉軍事上ノ知識皆無ナリ」。対馬海峡に至る「遠征ハ実ニ空前ノ壮挙」とはいえ、戦闘を指揮す

るとなると「何等軍事上ノ才略ナク」、また、戦闘に対する準備や指揮ともに「実ニ拙劣ヲ極メタリ」と非難している。

一方、日本海軍の勝因は艦艇などの武器だけでなく、艦隊の構成や多年にわたる連戦連勝から得た自信と高い士気にあり、各級指揮官間の統率関係が明確で「部下ハ許サレタル範囲内ニ於テ独断事ヲ処スル」ことができた。各戦隊の連携は突に見事、各級指揮官は上級指揮官に対し「自由ニ各自ノ意見ヲ陳述セリ」。「各戦隊ノ協同動作ハ実ニ完全ナリ」。旅順港下で小艦艇間の戦闘に巡洋艦や主力艦がただちに現われ「恰モ魔力ヲ有スル如ク時機ヲ失セズ集合スル」と賞賛している。

また、T字戦法についても東郷提督はわが艦隊の進路を遮断し、スワロフの左舷正横前で「馬蹄状ヲ描キテ正面変換」を行ない、わが艦隊の先頭を圧迫したが、この転舵はわが艦隊にとり「実ニ意想外」であり、「甚シク乗員ヲ欣喜セシメタ」。それはわが艦隊の弾着距離内で大角度の旋回を行なったため、「一時発砲不可能ノ地ニ陥リ」、これが日本艦隊にとり危険なことは、回頭を終えるまでの約10分間は「不動ノ停滞点」を生じ、「我ニ好個ノ目標ヲ提供スル」からである。トラファルガーの海戦でネルソン提督が、「致命的危険ナリ」といわれた「敵ノ縦貫射撃ヲ冒シ」、艦隊が一時発砲の自由を失う不利を顧みず、フランス艦隊の「縦貫射撃ニ暴露シツツ」、これに向かって肉薄した時のフランス側のウイリニヨ提督や将兵の「欣喜モ亦実ニ斯ノ如ク」であったであろう記している。しかし、ネルソン提督と東郷提督の「策戦ガ恰符節ヲ合シタル如ク」、賢明にして勇敢なる行動により「収メ得タル効果ノ偉大ナリシモ亦酷ク相似タリ」と東郷ターンを評価している。

### ▶おわりに◀

レーニン時代のソ連の教科書は、日露戦争を「日本を憤激させた有力な山師たち（ペゾブラゾフ一派のこと）の朝鮮における強盗的な目論見が、戦争への誘因を与え、それらが作り出した雰囲気の下に、1904年1月14日の交渉の決裂のうちに、ついに戦争が勃発するに至った。ロシア艦隊に対する成功的襲撃は日本に対して制海権を保障した」と事実だけが淡々と書かれていた。

しかしスターリンの時代になると、「日本帝国主義者どもは、日清戦争後、ただちに極東における勢力範囲の再分割のためにロシアとの戦争の準備を始めた。日本は朝鮮を、さらには清国の東北諸州（満州）をも略取することに奮進していた。……日本帝国主義者どもは、また、固有のロシアの土地であるサハリソ島およびロシア領全



バルチック艦隊を率いたロジェストウェンスキー中將(左)と、その下で第3太平洋艦隊を指揮したネボガトフ少将。

極東までも侵略を夢見ていた。そして、敗北に「仰天したツァーは日本の侵略者どもにサハリソ島の南半分をやってしまった」と変わった。

ゴルバチョフ大統領の自由開放政策から、一時的にロシアの歴史も中庸に戻った。しかし、大統領がプーチンに変わると大國史観と愛國史観に回帰し、2003年の教科書には「ツシマ海戦はロシア軍事史の汚辱の1頁となり、ロシア国民の国家的自尊心をいたく傷付けた」と変わった。大統領府と政府が主宰する歴史雑誌「ロジナ（祖国の意）」は、今年の新年号に日露戦争の特集号を出したが、「日本の奇襲を受けたから負けた」とか、国内の革命運動から生まれた危機的国内の混乱にはまったく触れず、「戦争を継続していれば勝っていた」、「賠償金を払っていないから敗戦国ではない」などの論文が掲載されるなど、ロシアの史観は変転極まりない。

一方、日露戦争の原因は帝政時代には「(必要な) 根拠地ノ用意ナク、徒ニ極東進出ノ速ナラン」ことを考え、武力に欠けていたため中国に妥協してアルバジンから撤退し、ネルチンクス条約を締結したため、以後「凡ソ一五〇年ノ間、黒龍江及支那ニ対シ行動スルノ自由ヲ喪失シタ」からだ、日露戦争の原因がネルチンクス条約を締結し国境を決めてしまったから満州への侵略が非難され戦争になったとしていた。しかし、自由解放後に書かれたロシア国防省軍史研究所のロストノフ博士（陸軍中佐）の「ソ連から見た日露戦争」（原書房）でも、「当時の版図に含まれるロシア領土が、日本あるいは中国のいずれにも属していなかった。ロシア人は無人の地に移住し、彼らは資源を発見し、町を建設し、地方部族と経済的活動の経験を分かち合い、殺し合いや戦争の廃止を援助しながら、これらの部族との平和的關係を確立してきた。ソビエト極東として知られている版図は永年のロシアの国土であり、多くの世代に渡るロシア人の巨大な努力によって発展した」と、領土に関してはロシアの歴史にはまったく変化が見られない。